

学校への他専門職の参入と教師の専門性

保田直美（所属なし）

1. 問題設定

これまで、日本の教師の仕事の特徴の1つは、その職務と責任の範囲が無制限に拡大しがちな「無境界性」にあるとされてきた（佐藤，1994）。また、日本の教師は、自らの役割について独自の規定の仕方をする「指導の文化」を持っていることも指摘されてきた（酒井，1999）。日本の教師は、〈多様な内容を等しく教育的に価値あるものとして「指導」すること〉、そしてそのための基礎として〈生徒との信頼関係を構築すること〉が期待されており、その期待に沿って自らの役割を規定している。子どもとふれあい、子どもを受容的に理解することで教師と生徒の間の信頼関係を築くことが指導上最も重要である——このような「正しい指導」神話に沿って教師が活動することが、学校組織が社会の中に存立するための基盤となっているのである（酒井，1996）。それゆえ、教師は単に教科指導だけではなく、様々な職務を担い、そして特に生徒との信頼関係を築く活動を行うことを重視してきた。

このように児童生徒との情緒的きずなの形成を重視し、全人的・包括的な教育を行おうとする教師の役割意識については、メリットとデメリットの両面が指摘されてきた。まず、デメリットとしては、教師の専門性の空洞化や多忙を招くことが指摘されてきた。一方でメリットとしては、生徒指導領域などで自律性を持つことが教職への動機づけとなっている面があるということが指摘されてきた。また、そもそも、教科指導を行う上で、生活面・心理面への配慮も含めた全人的・包括的な関わりが不可欠であることも広く主張されている。

しかし、近年、このような教師文化が失われつつあることも指摘されている。規制緩和・市場原理の導入を伴う教育改革の流れにより、学校が担う役割の限定化や学校内での機能分化が進んでいる。学校内に教師以外の専門職を配置することも、このような流れの1つとして通常捉えられている。学校に配置された教師以外の専門職の代表は、スクールカウンセラーである。現在、中学校の多くにはスクールカウンセラーが配置されており、それに伴い、生徒指導領域

を中心に、教師の役割や専門性が何らかの形で変化しつつあると考えられる。

本報告は、特にこのスクールカウンセラーの配置の影響に注目し、教師の専門性がどのように変化しつつあると考えられるのか、既存のデータや資料を参照しつつ試論的に検討するものである。

2. 分析視角

一般に、教師専門職論においてはこれまで、教師のみに注目した研究がなされてきた。これは、教師が学校に存在する唯一の専門職であったことに由来するが、他専門職の参入が始まっている現在、他専門職との関係も視野に入れた専門職論を展開する必要がある。そこで、本報告では、専門職システム論（Abbott，1988）の視点を援用し、他専門職との関係の中で、教師の専門性をとらえることを試みる。専門職システム論は、専門職がある職務に対して持つ管轄権（職務管轄権）が、いかにして作られ、社会構造の中に定着されるかを分析することで、当該専門職の発達をとらえようとする議論である。近接する複数の専門職をシステムとしてとらえるため、システム内のある専門職の存在は、自然とシステム内の他の専門職にも影響を与えると考えられる。

このような視点に立った時、注目されるのが、専門職間の職業的境界である。職業的境界は専門職が持つ個々の職務管轄権を内包するものであるが、境界線は、この専門職はこの範囲の仕事を担当し、と最初から実体を伴って厳然と存在するわけではない。Abbott（1995）は、実体は先にあって境界線ができるわけではないとしている。何らかの「違い」を示すものが複数あり（原始的な境界）、それが1つに結びついていくことで、境界と実体は同時に成立していく。現実にあるのは、個々の出来事（event）のみであり、それが世界を分けて違いをもたらしていく中で境界が生まれたり、変化したりするのである。医療系の専門職論では、このような立場を背景に、実際の職場で専門職がどのように職業的境界を生成しているかについての研究が展

開されている。

このような議論からすると、教師の専門性の変化について考察するには、スクールカウンセラーとの間に形成される職業的境界について考察する必要がある。そして、そのためには、〈スクールカウンセラーの仕事〉・〈教師の仕事〉という確たる実体があらかじめあると考えるのではなく、どのように互いが職場で起こる出来事の中で違いを作り出しているかを見なければならぬ。

スクールカウンセラーの仕事は、一般に個人向けカウンセリングに限定されると考えられがちであるが、実際には、もっと幅広い職務を自らの管轄としている。日本でスクールカウンセラーの多くを占める臨床心理士の専門性の根幹となっているのは、徹底した患者中心性である(保田, 2009)。一般に、クライアントを中心に据え、ケアを行っていかうとする専門職がフォーマルに想定する職域は幅広く、臨床心理士もその例外ではない。当然、教師の職域と重なる部分も多い。そのような状況下では、職場での差異化に向かう相互作用が専門性に与える影響は、より大きくなると考えられる。

3. 分析結果と考察

では、実際に職場で、教師とスクールカウンセラーの仕事には、どのような違いが位置づけられつつあるのだろうか。スクールカウンセリングに関する既存の質問紙調査や、臨床心理士が書いたスクールカウンセリングの事例報告(『心理臨床学研究』に掲載された23論文)を参照しつつ検討した。以下、現時点での考察の概略を示す。

まず見られた大きな特徴は、教育相談やいわゆる不適応生徒の対応はスクールカウンセラーの仕事で、教師はそれを行わない、という形でそれぞれの職務の差異化は行われていないということである。スクールカウンセラーの導入により、教師が生徒との関わりそのものを放棄してしまうことはほとんどなく、教師の負担感もあり軽減されていない。機能分化が進み、教師の仕事の無境界性や指導の文化が失われるという流れをスクールカウンセラーの配置が助長していることはあまりないと予想される。

ただし、不適応生徒全般への対応をスクールカウンセラーに任す、ということはないものの、不登校生徒の対応を主にスクールカウンセラーに任せる、という傾向は見られる。1998年度の配置校に対して行われた調査(伊藤, 2000)では、スクールカウンセラーに不登校生徒への対

応を行ってもらった学校は92.3%であるが、非行・暴力問題への対応を行ってもらった学校は53.6%である。学校によっては、不登校はスクールカウンセラー、非行は教師、といった形で問題別に仕事の違いを作り出している可能性がある。これは、人単位の分業とも言える。教師とスクールカウンセラーが別々の子どもにそれぞれ関わることで、互いに患者中心な、全人的な、専門性を維持している可能性がある。

とはいえ、臨床心理士による事例報告を見る限り、不登校でも教師があまり関わっていないと思われる事例はほとんどない。多くの事例は、両者とも生徒に直接関わり、さらに並行してスクールカウンセラーが教師に対してコンサルテーションも行っている。この場合、スクールカウンセラーと教師の違いは、「知識を持つ専門家」と「現場で日常的に接している時間が長く、日常的な情報を多く持っている人」として位置づけられがちである。このような差異化は、むしろ、これまで教師が持ってきた「指導の文化」、生徒とできるだけ関わって信頼関係を築くという傾向をさらに強める可能性がある。

スクールカウンセラーの配置により、教師の仕事の「無境界性」は減じたかもしれないが、「指導の文化」はさらに強められているのではないかと予想される。

【参考文献】

- Abbott, Andrew D., 1988, *The System of Professions*, The University of Chicago Press.
- , 1995, “Things of Boundaries,” *Social Research*, 62(4), pp. 857-882.
- 伊藤美奈子, 2000, 「学校側から見た学校臨床心理士(スクールカウンセラー)活動の評価」『臨床心理士報』11(2), pp. 21-42.
- 酒井朗, 1996, 「現代日本における学校組織の存立に関する社会学的研究」『アカデミア 人文・社会科学編』63, pp. 249-270.
- , 1999, 「「指導の文化」と教育改革のゆくえ」油布佐和子編『教師の現在・教職の未来』教育出版, pp. 115-136.
- 佐藤学, 1994, 「教師文化の構造」稲垣忠彦・久富善之編『日本の教師文化』東京大学出版会, pp. 21-41.
- 保田直美, 2009, 『臨床心理学知識の制度化と学校での受容』(大阪大学 博士論文).